鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹

黒

田

俊

雄

らは、「本地垂迹」の論理が民衆の願望を把捉し、低俗な形で旧い反動的なイデオロギを再編する。 という場合、その本質は「一向専修」の論理として把握することが出来る。これは荘園制社会における下からの多様な闘争に結合し 親鸞の思想も鎌倉末期の混濁した社会に埋没してしまう政治的意味を追究した。 れる。本稿はこのことを都市と東国辺境社会とのいわば両極端の場合をとり上げて分析し、日本思想史上最高の列に位するとされる てその代表的なイデオロギーとなるが、しかし一向専修は所詮順当に発展しない。これに対し、上からの荘園制秩序を擁護する側か このような二つの対立する論理のたたかいは、具体的には各地の社会的特質によつて規定され、そこから種々の複雑な偏向が生ま 鎌倉仏教史の活潑な動きについてはいろいろの角度から論じられているが、いわゆる新仏教が革新的な性格をもつている

都市の場合 「一向専修」について

東国社会分 本地垂迹説について

삗 東国社会台 異安心について-

五 総

「一向専修」について

親鸞の思想がどのような歴史的背景と社会的基盤から生 鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」 (黒田)

> まれたか、 純な反映としてではなく、そのたたかいをい で思想史の場合、その展開が、政治的・階級的な抗争の単 したのかという点にまで浮彫りにされてきている。 るが、最近はそれが親鸞のいかなる社会的実践の中で展開 髙の系列に位する鋭い自覚と論理とをもつているからであ 題である。それは一つには彼の思想が、 という問題は、 数年来各方面から論じられた問 日本の思想史上最 かに宗教的真 ところ

に具現したかということが問題なのであるが、 鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」 しかもか (黒田

څ

理

ての 外の他の一切の日本宗教思想の発展をも規定する基本問題 宗教思想の真実の苦悩を説明し得ないのみならず、真宗以 まりこのことを追究しないでは親鸞ないし彼以降の人々の れるそのことに、 条件がつねに充分な成熟をみなかつた」と薬龍吉氏がいわ 信の本質とされる変革的原理が正当に評価され実践される 力の論理のうるわしさとしてよりも、 の自然法爾消息が、"神祇不拝。"余仏不信』の問題につい | 悲壮な克服の論理として成立していることは、 私たちの注意を惹きつけるのである。 「神祇不拝・余仏不 絶対他 つ

思う。 つて、 仏教史を通ずる最も基本的な問題であることをのべたいと ことにつき、 していたかということを明らかにし、 ということがいかなる基盤をもちどのような敵対物に直 本稿はこの点を追求するために、 ただそれについては、 鎌倉仏教史を通じて相対立する一方の極を把握した あらかじめ説明しておかねばならないかと思 "一向専修"という側面によ Va ひいてはそれ わゆる "一向専修" が鎌 面

側面であつたのである

意味で一向専修ということは、

鎌倉新仏教の核心をなす一

を見逃すからである。

それは第一に、一向専修は普通念仏による往生について

දු ® れば、 b いが、しかしこの広さは重要であつて、こうした素地の上 蔵 心不乱のためなり」という意味で雑行と区別されるのであ ことである。 いわれるが、 彼はそういう実例を挙げて専修をすすめているのであ 勿論これだけでは粗雑な常識的な意味のものでしかな 薬師なんでもよいのであり、 帰依の対象は観音であつても弥陀であつてもまた地 粗雑な意味では念仏以外についてもいい得る たとえば 「沙石集」 単に の著者無住の考えによ 「専修の本意は一

観を前提しつ、それを克服する論理そのものを指すという ことである。こもこも専修念仏者が弥陀一仏に帰するとい 第二にもつと大切なことは、一向専修というのは、 調に発展した高度な代表的なものとされるのである。この

宗教思想が成立したのであり、

浄土宗がそのうちで最も順

に親鸞・日蓮・道元などの余行を排する純粋にして激

ĩ

証 じく一向専修は多神観の上に成立した。ただ、 義絶問題の際にも「三宝を本として三界の諸天善神! 0 他の神仏の存在を否定していたのではないのである。 うのは、 論、 対立するからである。 自己を処する方向において、 大切なのはむしろこれから先の自覚と実践の論理において、 とくかふり候へ の龍神八部、閻應王界の神祇冥道の罰を親鸞か身にことこ 撃したのである。つまり一向専修は、 巻末や「愚禿悲歎述懐和讃」の中ではげしい 確に弁別したのであつて、 仏のみが凡夫往生の正因であると説き、 まで拝礼するのであるが、法然は「選択」によつてただ念 すなわちこういつた多数の神仏冥道の充満した世界の中に 親鸞が、 において信の証果の内容として真仏土と化身土とを明 時には我国の諸神諸貴人から怨霊を中心とする神霊 弥陀のみに絶対者としての「神格」を認めており、 最も深刻に対決しなければならなかつた善戀の し」といつているように、 雑行兼修の場合は数多の仏菩薩は 殊に神祇冥道については化身土 一向専修は雑行兼修の諸宗と 多神観の中でのたた 旧仏教諸宗と同 親鸞は 句を連ねて排 とのことが 「教行信 四海 老年 勿

ので省略する。)。

りも、 をとぐ、 碍することなし」という歎異鈔の条は「善人なおもて往生 である。 ならば、 かいとしてのみ最も見事な実践の論理として成立 に結集して整理する必要があるが、 合重要である はるかに実践的な核心を打出した側面としてこの場 いはんや悪人をや」という内省的自覚的な表現よ 信心の行者には天神地祇も敬伏し、 「念仏者は无碍の一道なり、 (従つて親鸞の思想の諸要素諸側面をこの点 いまそこまで出来な そのい はれ 歴界外道も障 b し得たの か んと

あり、 往生」を把握している。 題になつており、 では一向専修という形で仏教界の新傾向 を隔ちて嫌ふ風情」 衆」とか「専修念仏の輩」とかいう形でい 倉時代を通じての念仏諸宗に対する弾圧には の面でそのように論議されたのでなかつたことである。 向専修という形で問題にする第三の理由は、 また沙石集は 決して悪人往生とか在家往生とかその他 を指摘しておりその一部として「悪人 「近代」 思うに当時新仏教特に念仏諸派の の特質として「一 が特に われ いつも「一向 政治的 向専修の余 ていたので 事実当時 に問 鎌

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」

(黒田

鎌倉仏教における「一向写修」と「本地垂迹」

(黒田)

6

理解されたのであり、 思想における基本的な、 仏不信も一向専修の直接的内容に他ならなかつたのである もつ様々な内容は、 そこで以下、これが「正当に評価され実践化される条件」 とされる変革的原理」とは即ちこれに他ならないのである のであつて、森氏のいわゆる「神祇不拝・余仏不信の本質 想界における相対立する一方の極として問題になつてくる がどうであつたかを、 以上のような事情から、 世間には一向専修という面に集約して 最も政治問題化し易い神祇不拝 各地域の特質との関聯の下に追究し しかも政治的な結節点として、 "一向專修" はこの時代の宗教 · 余 思

1 森龍吉氏「自然法爾消息の成立について」 省略する。 七)三八頁。なおこの問題は服部之総氏「親鸞ノート」(正 などに密接な関係があるが、本文各所で触れているので 赤松俊秀氏「親鸞の消息について」(史学雑誌五九―一 (史学雑誌六〇— てみたいと思う。

- 「沙石集」一の十、 八の七の
- 家永三郎博士 「中世仏教思想史研究」六三頁。
- (5) (4) (3) (2) 「聖教全書」宗祖部一七五頁以下、及び五二八頁等。 一脈文集第二通(真宗聖教全書、 祖師部七一八頁)。

田村円澄氏 学区)参照。 るのは興味深 という言葉もかつてはこれと同じ性格をもつていたといわれ 「沙石集」前揭筒所。 「正人正機説の成立」 なお悪人正機の政治的階級的意味については、 い。越智武臣氏「清教主義の一姿態」 なおイギリスにおける「ピュ (史学雑誌六一— 1 (西洋史 リタン

都 市 Ø 場 合

るが、いま特に宗教思想の上で重要な役割を果した京都 性格をもつ京都・奈良・鎌倉をすべて問題にする必要があ ついて考えてみたい。 ここで都市という場合、本当は古代末期的都市としての

霊・天災・火災相つぎ、 安末期以来、 頽廃とが支配していたという点に求められよう。 たが、このことは鎌倉時代に入つても何ら変ることなく、 この時代の京都の特質は、 京都は過差の流行・風流・殺人・強盗・怨 激情と頽廃との末世的風潮にあつ 要するに全くの行きづまりと すでに平

意されるのは、それら諸々の事件の張本が、悉くといつて 層粗野さえ加わつたといわれる。 しかもその中で特に注

ない 動に狂躁的に加わるか或は群盗に身を投ずるかじかなかつ さざるを得ず、しかも他方に祭礼などを機に集団的示威運 かなる方途も見出されぬという全く停滞的な現象を生み出 等などは古代家族的な形式の中に身を定める以外に他のい と解体と反抗と頽廃とを繰返したとしても、 に、ただ全体として窮乏し弛緩し頽廃しゆく他に途がなか 統制力も崩れているにかかわらず、本来生産的基礎をもた かゝ 関が次第に侵略されて年々都市全体が窮迫しつつあるにも かわらず、 にある鄎等・下人などと本来律令制の品部・雑戸から発し 富裕な商人とを除けば、 および院附属の細工師以下の職人であることである。つまの つたからである。こういう所では、全体としていくら没落 た諸嶽の工人との他に都市人口なるものはなかつたにも りこれは、 よいほど、 かわらず、 京都では何一つ新しい秩序を生み出すこともないまま 貴族・官人・受領らの郎等・家人・下人等々、 しかも第二にその経済的基礎たる地方の公領荘 第一に京都には貴族・受領・高僧などと若干の また第三にそれ故に治安が乱れ古代家族的な これらの人達の家父長制的支配下 所詮下人·郎 か

る。

たのであり、全体として鎌倉時代には「奴隷の叛乱」とも いうべき中下層民の集団化が顕著となつたのである

特質は、石母田正氏が曾て述べられたように、 り 本的には彼等を孤独で反省的な魂の持主たらしめたのであ の中へ飛びこませるような「自由」ではあるけれども、 意識を欠如した」自由で孤独な個人であるという一面であ ての権威と階級的拠り所とを喪つた」結果、「公的共同的 た事は数多く指摘されている。ただ彼等がもつもう一つの。 民の集団行動や群盗の先頭に立つてさわぎ廻つた者があつ とらえ方が問題であるけれども、中下層の貴族の中には庶 的にはそれほど異つたものとは思われない。 費族の特徴であつたとみられるのである このような都市民衆の状態に比べて、貴族層とても実質 この後者の側面こそが狂躁的な都市民衆に対比される これは他方には貴族であることをかなぐり捨てて群集 貴族層という 「貴族とし

術的な現世利益、 る京都の状態に対応する宗教意識の特質をなすものは、 さてこのような非生産的な、 幻想的激情的な浄土思想および哲学的思 「末法」的な腐朽しつつあ 贶

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」

(黒田)

菜であつたとみられる。 次にこのことを中下層貴族の場合

と民衆の場合とに分けて考えてみたい。

はこの のそれを「綜合」したといわれるのは、具体的にはどういしかし博士が法然・親鸞は庶民のそれを「母胎」とし両者 自覚を前提とせざればその由来を把握し難い」と考えるが親鸞の深刻な否定的精神はやはり平安貴族の深い有限性の な論争点であつた。 身の逼迫のためばかりでなく、 中期の階級諸関係の実情を根本に据えた上で、 は先に指摘したごとく、中下層の貴族がいよいよ以て古代 うことなのかをこの際明らかにしておかねばならない。私 かという点は、 族的な系列に属するものか或は庶民的な系譜に属するもの 0 末期的都市一般の中に埋没しなければならなかつた鎌倉初 んだという貴族的立場からの庶民の往生―専修念仏の成立 立役者であつてそとから非人遊女の往生や専修念仏 まず貴族についてであるが、 「母胎」ということに必ずしも反対しないが、 親鸞の出自の問題にもからむ先年来の困難 私は家永博士が説かれるように「法然 たとえば法然が大乗円順 周知のように専修念仏が貴 単に彼ら自 それ に及 戒

の論争点であり、それはそれで更に研究されて然るべきで太后宮大進有範の子」であつたかどうかは中沢見明氏以来 て栄華をもひらくべかりし人」であつたかどうかは、 あろうけれども、 世の苗裔大織冠 あることを否定するかのような論説は、 うものが先にのべた理 受取れるのであつて、 親鸞が貴族の末裔であつたとしても以上の点からも素直に らないと思う。私の考えでは赤松俊秀氏がいわれる如く、 鈔」を承認したところで親鸞が高貴の身であることにもな 味をもたないのである。 味方であることを強調する意図をもつて彼が貴族の末裔で を考えるからである。 時代の実情から考えれば甚だ疑わしいのであつて、 かあれば朝廷につかえて霜雪をもいただき、 一位内麿公(割註略)六代の後胤弱宰相有国郷五代の孫 (註略)の玄孫近衛大将右大臣 いずれにしても覚如が 従つて親鸞の場合にしても、 それは第一に、 由から 「俗姓は藤原氏天児屋根尊二十一 (親鸞のような) 当時の都市民 必ずしも重大な意 v うように 射山にわ 反省的 (割註略) 民衆の 一衆とい 「御伝 との な思 従

想を生み出す基礎をもたないこと、

第二に、

親鸞の思想は

高める程のものであつた以上、 b 者、 明らかに関東在住中叉は帰洛後に完成したものであること。 鸞の宗教が から専修念仏が農村を基盤にしていたことを示すものであ 興福寺秦状が「洛辺近国猶以尋常、 は法然ないし浄土宗についてもいえることであり、有名な 目的ではないから、詳しく立入るわけにはゆかないが、これ という方が適切であろう。 表するものではなく、むしろ平安貴族の最後の華であつた どからである。 族が次第に都市民の中に解消したためとみられること、 るものが ぬこと、第四に、 0 第三に、 すなわち農村的条件を考慮に入れなければならないこと、 田 専修僧尼盛以::此旨:云々」といつているのは、 この点 . 舎の門弟」以外にほとんど京都に支持者も門弟ももた 帰洛後の親鸞ないし覚信、覚如などが 親鸞以後もはや現われなかつたのは、 鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」 「狂躁的・呪術的」な念仏をもその中に導入し にとそ本当の この意味で親鸞は少くとも都市庶民層を代 法然親鸞の如く「純粋に」思想を発展させ 「綜合」の意味がある。 法然や親鸞を論ずるのが本稿の 都市民衆の中に専修念仏者 至于北陸東海等諸国: 中下層の貴 「親鸞上人 法然 (黒田 はじめ 親 な

> なのである。 が都市に足場をもち得たのは早くて室町時代へ入つてからが都市に足場をもち得たのは早くて室町時代へ入つてからが存在したにしても怪しむに足りないが、総じて専修念仏

てある。 このような貴族の場合に比べて民衆の場合はどうであつ このような発展的な方向或はその萠芽を含んでいたかどうか 集的なものであつたと思う。そうした状態については、す 実的なものであつたと思う。そうした状態については、す でに村山修一氏のすぐれた研究があるからここでは一々列 集的なものであつたと思う。そうした状態については、す でに村山修一氏のすぐれた研究があるからここでは一々列 なような発展的な方向或はその萠芽を含んでいたかどうか である。

べきであろう。そもそも末法思想ほど当時の末期的な都市徳太子を讃仰する講がある。凡そ聖徳太子が讃仰せられる個人教の始祖となつた、という信仰によるが、その場合この仏教の始祖となつた、という信仰によるが、その場合この仏教の始祖となつた、という信仰によるが、その場合この仏教の始祖となった、という信仰によるが、その場合このと、日本の時代に最も盛に行われたものに太子講、すなわち聖この時代に最も盛に行われたものに太子講、すなわち聖

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田)

ある。 との本質的問題が関聯してくるのであるけれども、 のであつて、 親鸞にしても日蓮にしても太子を讃仰してはいるがそれは のであつたから、 から成長しつつあつた寄生的な商人層の願望にも応ずるも するだけでそれを克服する契機を全然含まないものなので から一歩も出ないのであり、 秘不可思議を強調し、太子の恩徳に廻向発願すべきを説 て成つたとみられる諸種の太子講式では、太子の生涯の神 ことに他ならず、その思想体系からみればあくまで傍系的 と同じく広汎な大衆的基盤の上に立つていたというだけの 彼らが末法思想の上にそれを切開く論理を創造していつた を生みだす形で行われたかどうかに問題がある。 ろであるが、ただしかし、太子信仰が末法思想以上のもの 民全部にとつて全面的に共通して受取られるものはなかつ |面にすぎなかつたのである。ところが旧仏教側によつ しかもかかる利益本位の呪術性は、 且前述の都市の現実から当然首肯されるとこ 所詮現世利益を願う呪術ない ここに日蓮宗の特異な性格と社会的基盤 換言すれば、 当時彼らの一部 末法思想に対応 しエクスタシ この点、 全体と

こういつた事情から都市民衆は、当然旧仏教の最適の温のを礼拝するのである。をめぐつて殺人強盗の泥沼の争をつづけながら結局同じもをめぐつて殺人強盗の泥沼の争をつづけながら結局同じもしては富裕な商人と貧窮化した都市下層民は表面的には富

迹力」といわれる才の持主となつて、その和歌は「常詠必守。 しとしている。 ついて「爱内証功、外用徳有、先外用徳者、 護」とされたのである。更に複雑な例として稲荷大明神に 怨霊たる菅原道真は、 乃至一切ノ精霊等」 までも挙げて 「我等至心弘誓」 すべ 上宮太子御霊から伊豫親王の怨霊、 いうものには、天神地祗や「水陸原沢一切ノ精」は勿論 になつたのである。たとえば「長講仁王経般著経会式」と 神祇や自然物の精霊から怨霊に至るまですべて取扱うこと の側の雑多な仏菩薩の方向へ組織したばかりでなく、大小 れるものがこれであつて、単に観音 この民衆の心情を組織した。旧仏教の復興・民衆化といわ 床になつていつたが、そればかりでなく旧仏教は意識的 また「神道集」では平安時代の最も有名な 鎌倉末期には「本朝不思議、 · 地蔵 「結恨横死古今ノ霊、 弥勤など自己 一者諸病除一 和光垂 K

V 秘的な韜晦論に導いて自己の温存をはかつたのである。 たのと反対に、 神地祗を排して一神教的な方向へ民衆を指導すべく努力し 利益の段階に低迷させたのであり、専修念仏が徹底的に天 て俗信とからまりつつ生まれてくる救済の要求を結局現世 没論理的な呪術と祈禱の神になるのである。 旡量也x<」という形で総括するより他ない 一切を含めた ことはいうまでもない。 遍照也、 悲(今度生死厭)何時仏世期」といい更に「浄土遠)心王シムイン の功徳を説いて「而 此法知 故六道流転……歎 歎 悲 説くかと思えば、 本来の田の神の信仰と狐についての神秘観が含まれてい 求も書きつらねる。 非」と、「惡処、 者福德得……(中略) えば、 けれ ども基本的な問題はやはり都市民衆にある。 聖衆近在心数曼陀也」と密教的即身成仏の浄土欣 彼ら自身荘園制社会の中心としてのゆきづまつた 鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」 「呪術」の衣をまとつて現われる願望を神 本尊願海勝利、既利益莫大」なることを 稲荷大明神と辰狐との本地仏を挙げてそ なおこの現世利益と浄土礼讃の他に、 此如十九種一切靈験、何一切衆生願 結局は「惣此明神、 つまりこうし 応先親亦力用 (黒田 繰返し . る

側に組織されその存続の新たなる基盤となつたのである。混迷に陥るだけで、反つて古代政権と不離一体の旧仏教のな動きとなつても所詮「奴隷の叛乱」の域を出ない低俗と倒する論理を把持する物質的基礎をもたず、いかに群集的古代都市の中で腐朽し苦悶しながらも、それとたたかい打

第六節。なお本節は村山氏の右浩に負う所が多い。 対山修一氏「鎌倉時代の庶民生活」所収第二論文。第四節及

② 村山氏・同右

- ③ 「宇津保物語についての党書」(歴史学研究、一一五・六号)
 ③ 「宇津保物語についての党書」(歴史学研究、一二一号)。家・主光貞氏「藤原時代の浄土教」(歴史学研究、三一号)。家・一三一号)。服部・赤松両氏前掲書等。 井上・家永両氏の間の門置は、意志的な「信」を基調とする法然・親鸞の思想が静的・情緒的な貴族社会の念仏からくるか、狂躁的・呪術的な前という点である。
- ⑤⑥ 家永博士、右論文
- ⑦⑧ 「御伝鈔」(聖教全書・列祖部六三九頁)。

(9)

(10)

の発願と中止、十七年後の病臥の話などを考えても、彼の思うかは論議されていることであるが、恵信尼文書の千部読経「教行信証」の「元仁元年」が三願転入の年を示すものかど中沢見明氏「史上の親鸞」及び先掲服部・赤松両氏の論争等。

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田)

土、「親鸞聖人行実」十六、二一、二五、三一頁等)。 土、「親鸞聖人行実」十六、二一、二五、三一頁等)。 忽 永博恵が関東在住中に鍛えられていつたことがわ かる (家 永博

(13) 点を弁明しておきた 市庶民に受容されたとさ 重 た 従来専修念仏は部郡民衆に受容せられたと漠然と説 な業績である。 五四号) 氏だけであり、 このことを積極的に論証しようとされたのは、 専修念仏の階級的政治的意識を追究された点で貴 けれども氏が専修専仏は貴族に排斥され都 (同氏「専修念仏の受容過程」 歴史学研究 れるの には私は反対であるからこの かゝ 田村円 れ て

挙げら 得な 覚でありまた常とう的 とが 縁せんとして反対された例は、 な徴 たことを物語つている。 盾をはらみ、 か 証 بخر かる上 として挙げられたのはほとんど極く上流の貴族で 証 した嫌疑と 結合する形で受容されたといわ いのみならず、 れは第一に、 れた嘉祿三年の専修念仏弾圧事件の は何一つ見当らな 流貴族の行動が当時決して貴族層全体の指標となり 特に中下層の貴族が専修念仏の側 いう理 田村氏が貴族が専修念仏を排したことの 兼実の第三子良輔が四天王寺の念仏に結 な弾圧の口実でし 由は根拠曖昧で、 第二に、 V, 明月記にみえる念仏者が群 反つて貴族層内部に徴 都市庶民の斗いと専 れるが、 か 支配者が 記 ないともみられる 事からは積 その例証 常に陥る幻 付こうとし あ 修念仏 として 妙な矛 る 盗を が 例

> 群集的 敢て長文を註した次第であ つて積極的に反対説の論拠となり得るものだと考えるので、 を保つていたのでなかろうか。 とりのようで非礼であるが、 に都市庶民の間 を承久以后暦応までの間五八件を列挙したものであるが、鎌 注進状は չ については喜欣三年のこの条だけであることから考えると、 倉中期以降微細 また祇園 いら八 浄土宗の在京諸派もほとんど宮廷との接近によつて存続 狂躁的な念仏集会でなしに専修念仏が、どれほどまで 領内 坂 「祇園社内犯科人跡不及使庁綺、社家致其沙汰勘例」 神社の記録についていえば、この康永二年三月 において専修念仏者の住宅が破却検討を受け に受容されたか甚だ疑わしいとせねば な犯科五八件もの多数を挙げながら専修念仏 శ్ర 実は氏の根拠とされたものは反 田村氏の所説に対し揚 にならな 足

ものを専修念仏と区別して考えねばならないこというまで は当時の記録に散見するが、 かつた」と記しておられる 頁)。 つた」とされるがしかし なお豊田 念仏者が都郷に充満する(新編追加) 武氏は浄土宗・真宗 「充分な史料を探すことが (同氏「日本商人史」 念仏勧進などの群集的 Ø 「信者 に多数の という様な表現 商 狂 世 Τ. 篇二三 が出来な 一業者 から

村山氏前掲者三五一八頁。 辻博士・前掲書一二八頁以下参照村山氏・前掲書・第一論文。

16 15 11

結合の事実との関連のもとにとらえることが必要である。例面からばかりでなく、日像以降の京都の日蓮宗の商人とのが鮮かに指摘されている。しかしこの事を浄土宗に対抗するを残しながらしかも浄土宗を裏返した性格をもつていることを残しながらしかも浄土宗を裏返した性格をもつていることを残しながらしかも浄土宗を裏返した性格をもつていることを残け土・前掲書所収「日蓮の宗教の成立に関する思想史的

1

- ® 村山氏・前掲書二四―七頁。
- 広くみられたことである。 三八○頁、四二四頁。なお和歌の霊験を説くのはこの時代に 「神道集」(横山重氏編・彰考館本写真版──以下同じ──)
- ⑩ 同右、一一二頁以下。

三、東国社会 ()――本地垂迹説について――

「神道集」に収録されたこの地方の緑起の特色をなすもの例がし、いわゆる辺境地帯とされる東国においてはどうであめらか。いま京都における現世利益を「神道集」によつて東国の場合を検討し、旧仏教特に本地無述説についてのべてみたい。し、旧仏教特に本地無述説についてのべてみたい。し、旧仏教特に本地無述説についてのべてみたい。

出てしまつて本地仏のことは申訳け程度にしかみえない。をはじめ、赤城、伊香保、那波大明神等々の民間説話は、をはじめ、赤城、伊香保、那波大明神等々の民間説話は、をはじめ、赤城、伊香保、那波大明神等々の民間説話は、をはじめ、赤城、伊香保、那波大明神等々の民間説話は、をはじめ、赤城、伊香保、那波大明神等々の民間説話は、をはじめ、赤城、伊香保、那波大明神等々の民間説話は、をはじめ、赤城、伊香保、那波大明神等々の民間説話は、豊富な民間説話である。すでに著名な甲賀三郎の物語は、豊富な民間説話である。すでに著名な甲賀三郎の物語は、豊富な民間説話である。すでに著名な甲賀三郎の物語

いわば惣領制の型にはまつた表現が普通である。たとえばいわば惣領制の型にはまつた表現が普通である。たとえば野馬郡地頭郡馬大夫満行申(中略)満行墓先成後、郡馬郡八郡馬郡地頭郡馬大夫満行申(中略)満行墓先成後、郡馬郡八郡・北京の東国説話の神々について第一に指摘される特色は、かかる東国説話の神々について第一に指摘される特色は、

ていたのが東国説話の特質であつたとみられるのである。

よつて分解され脚色されること少く、

つまり在地的な民間説話が中央貴族の政治や煩瑣な教説に

であつて、古来の末子成功譚の形式もこういつた形で適用というように、典型的な惣領制理念の上に話が展開するの

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田)

自然成長的に発達し

鎌倉仏教にけおる「一向専修」と「本地垂迹」(黒田)

姫君などが神々と顕れたものである。更にまた高光中納言の北の方、乳母の大夫、その女房、御妹、御姉って説話の内容それ自体として、神々が一族であることが説されるのである。更にもつと大切なのは、表現形式でなく

ように信濃・上野一帯の説話が連続し、 合は勿論、 関係ばかりでなく説話の筋にも相互の関聯がある。ながく 理 存在したことは事実とみてよく、 ならないが、 事情などの複雑な問題を考慮にい つた事情は、 縁起が大和・近江・信濃などにまたがるのである。こらい なるから内容は挙げないが、 というように諸所の神々の血縁関係がみられる。また血 念によつて表現されている点に注意される 赤城大明神 伝承の混合や伝播の系路、或は筆者の個人的 ともかくこの時代にこういう一連の説話群が 鉾大明神 赤城三所明神相互のような場 且これが惣領制的な族的 れて細密に論じなければ ――諏訪大明神という また諏訪大明神の 緑

かかる惣領制的社会関係を反映した説話群が、この地方

決して仏菩薩と同格のものではない。

つまりここでは神は

る――というような諸事情を考えれば、極めて自然に納得のべる如く、惣領制は崩壊はしないが内部の諸階層の動きが活潑化して旧来の枠をとえるような横の交渉が拡大されが活潑化して旧来の枠をとえるような横の交渉が拡大されが活潑化して旧来の枠をとえるような横の交渉が拡大されが活潑化して旧来の枠をとえるような横の交渉が拡大された。上野が新田・足利なに発展したことは勿論偶然ではない。上野が新田・足利なに発展したことは勿論偶然ではない。上野が新田・足利な

一種の精霊であり、仏法聴問のために集つたりするもので、 はいっというよりは本来人間であつて神となつてからも嫉妬したり争つたりする上に、人間の社会へ入り でからも嫉妬したり争つたりする上に、人間の社会へ入り でからも嫉妬したり争つたりする上に、人間の社会へ入り でからも嫉妬したり争つたりする上に、人間の社会へ入り でからも嫉妬したり争ったりすると、 のができて人間と戦つたりすると、 のができて人間と戦つたりすると、 のができて人間と戦ったりすると、 のができて人間と戦ったりすると、 のができて人間と戦ったりすると、 のができて人間と戦ったりすると、 のができて人間と戦ったりすると、 のができて人間と戦ったりするとので、 でからも嫉妬したりからすると、 のができて人間と戦ったりするとので、 でからも嫉妬したりからすると、 のができて人間と戦ったりすると、 のができて人間と戦ったりするもので、 でからも嫉妬したりからないである。 でからも嫉妬したりからも人。 のができて人間と戦ったりするもので、 でからも嫉妬したりからないである。 来ることである

人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。 人間の文学的投影像に他ならないからである。

これに甚だ異質的な種々の脚色を施さねばならなかつた。眼目異名而已」というととを説明する必要があつたから、道本地諸仏菩薩、々々迹化神明道、当、知神明者仏神同譬、道本地諸仏菩薩、々々迹化神明道、当、知神明者仏神同譬、祇園社や熊野権現と同じく、その霊験を説き「夫以神明神社ところがこういう素朴な神々についても、「神道集」は

本地虚空蔵であり上野国惣社の本地が普賢であるのかは全の作意ではないであろうが、ともかくなぜ能登石動権現が利益莫大を説いたことである。これはすべてが「神道集」その第一は、すべての神々に例外なく本地仏を配置して

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田

型で、且その地頭なるものが、加若次郎和理と子持御前ととの関聯を附加したこと、これと共に全体が王朝文学的との関聯を附加したこと、これと共に全体が王朝文学的との関聯を附加したこと、これと共に全体が王朝文学的との関聯を附加したこと、これと共に全体が王朝文学的との関聯を附加したこと、これと共に全体が王朝文学的との関聯を附加したこと、これと共に全体が王朝文学的との関聯を附加したこと、これと共に全体が王朝文学的との関係を開始を開始を表現してある。第二にはすべての説話に皇室の歴史

めの文学的操作なのである。が成立たないからであつて、客観的には所詮垂迹を説くたいえば、本来の形では先にのべたように仏教的ペシミズム

のである。しかもなぜこういう形にしなければならぬかとという調子の、凡そ当時の地頭の気風とはかけはなれたもの恋物語のように安直な王朝的なめそめそした人間であるの

(321)

る人・神・仏の関係と垂迹説のそれとの矛盾である。筆者に矛盾に陥らざるを得なかつた。その一つは、説話におけて神道集」は最も大切な本地垂迹の原理について不可避的来たにしても、異質的なものをつなぎ合わせた結果として、来たにしても、異質的なものをつなぎ合わせた結果として、

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」

(黒田)

に則り はっ がはるばる日本へやつてきて神と顕われるという話は、 世衆生利益御戛也」と仏が神どころか人間にまで垂迹する 我国遊 必人胎借 衆生身成 身苦悩受善悪試後、神明身成悪 拠を示し、仏が神と顚われることをのべ、更に「諸仏菩薩〉 末法中 現 天明神、利益衆生こ という文字を引いて典 迹を在地説話的に物語つたものである。)。 る(印度の狗留吠国の長者玉芳大臣の娘好美人や秦者大王 するための論に他ならないのであるが、しかしここまでく と解説したのである。これは明らかに入間的な説話を吸収 頭」ということを「悲華経」なるものから「我滅度後、於 かはつきりしないのであり、 つまり「神道集」では神が本来人間であるのか仏であるの 法をきいて仏になるという順序と逆であることがわかる。 ると、さきに述べた、 - 和光同塵は結縁の始」といら当時の垂迹説の根本原理 「神明御本地定仏菩薩」諸仏世界利益給,為、 人間が法を悟つて神となり、 **論理的に矛盾しているのであ** 神が仏 必神明 垂

ことを信じて凝わなかつたから、 れどもわが 「神道集」の作者は、 更に教理的にもこのこと 神が仏の垂迹である

このように「神道集」は、

も説明する。 無言論判こ ということにしておく。 には敬礼を尽くせばよい、」というのである。 俗凡愚、権実難」弁、 約:東利益衆生:為和光垂迹八相道終論尤可:帰依:』である 蛇鬼である。権社の神は『往古如来深位大士、教』化六道 がある。『悪霊悪蛇物取付、人悩乱』のが実社の神で本来 どうするか」という問に答えて、 に『一度神礼、五百生蛇身受」身』とあるといつているが 此条不思議、 云 終権者符属成、 しかしいずれにしても『日本自」本神国、惣可:|敬礼|、国風 に無理からぬことである。 そこで「只本朝辺洲故無』仏説1、 か? にいろいろ矛盾相違があるがこれはどう理解したらよい を論証すべく努力した。 以」何可」知耶」という根本問題にゆきづまる。「答、実 「神道集」は自問自答してそれを一々曲りなりに 指修多羅明文不」見、又菩薩論蔵不」判、」。 けれども「問、 亦如」此』であるから、 只神随敬礼何失有、 大体仏教と神道は、 大小権実明神、 「神には実社、権社の別 また「或る人が昆吠論 何でもよい 况設始実者云、 本地 教理·儀礼 ・から神 仏菩薩

(322)

ら独立せず、 とがそのまま宗教的に神秘化される。従つて観念が現実か まつた。つまり説話を吸収しようとしたために、 としたから、結局宗教としては最も低俗なものに堕してし 下げることによつて神仏両者の属性の矛盾からのがれよう 神話と伝説(ないし歴史)とが縫合され、 高度な宗教の特質たる彼岸の世界が展開しな 呪術と精霊 神格と人

V

いのである。

神の種 に、 この意味で一種の指導的役割を果していたと思う。 説として神を仏と同一とみたのである゛この段階までは゛ 生の一として仏法を喜ぶという形でデモー を仏の地位に引上げようとしたのであつて、本地垂迹説は りも仏を優位におき、次で平安中期から本格的な本地垂迹 しなければならない。そもそも神仏習合は、はじめ神も衆 地 一垂迹説の適用に伴う必然的なものであるという点に注意 さてかかる事情は、 鎌倉初期 々な性格を捨象し、 地方的農村的勢力のより広汎な興隆ととも 以上のことから明らかなように、 権実を区別するよりもむしろ神 = ッシュな神よ しかる 本

動理

一論の最後の論法となつたのである

1

のである。本地垂迹説は今やイデオロギー斗争における反 く皇室の末裔とし、官位を附したもこのことを証明するも 対し貴族らが古代国家の権威にすがりつつあくまで本所と 如く、全く雑然たる没論理的なものに堕落せざるを得ない よう、先に示したごとく、 してその生命を保とうとした各段階に照応する現象といえ のである。それはいわば荘園において在地領主層の勃興に は真言の教学に発しながらも以上「神道集」についてみた なり、従つてそういう形で形成された教説は、もと天台又 仏を自己の側に組織する方便としてのみの、 一勢を以て表面化するや、 地方の説話の主人公をことごと 本地垂迹説は単に旧仏教側 俗悪な論法と が神

つて占められており、 Ł 装の如く東山道その他東国地方と畿内のものが特別に多いこ をとつているが、一読してわかるようにかなり地方的 神道集は U) が あ わか 안 ているのをみると作者が畿内の諸社と同 .. る。 すなわち十巻五十篇の説話を地域的に分類すると次 応全国 しかも東国十九のうち十が上野・ の神 また本書の最后に長文の「諏訪縁起」 々 の縁起譚を収録しているような体裁 様に 信濃 両国によ な偏り

にその生活と結合していた説話や神祗信仰がもはや抑え

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田

わかる。 ح の手がかりとするのは らないが、本節で分析 **う事情によるかはわか** を重視していたことが のためである。 それがどうい

柳田国男氏「甲賀三郎 の物語」(「物語と語り

2

部·	その他(亦山・尾張)	畿内(紀伊を含む)	四国・九州(伊豫・豊前)	中前	東国(信心・上野・下野)	神道理論	
50	2	12	2	6	19	9	

が示されている。 所収)に、 この物語の広汎な基盤とそれについての分析

一神道集」三六八頁。

3

- (5) **(1)** 同三一八頁。 同三二四頁。
- 6 卷八、四十三。
- 7 巻七・卅七と巻十・五十とを参照。
- (8) 矢文書には、在地側でその受入れに勇み立つた様がらかがえ 信濃は鎌倉陥落後に北条氏が落のびようとした所であり、 4:
- 9 新城常三氏「中世の信濃」(史学雑誌五七一五)。
- 10 七頁)。 諏訪明神と下の宮および 鉾大明神の 三角関係 (同音 二九四 また日光権現と赤城明神とが沼を争つた話など(一九
- (1) 伊香保の明神は山神たちを召集めて国司や目代と戦い(三二

七頁)諏訪明神と北の方の争いに近くの人間は肝を冷した (二九五頁)。

- 12 同三四〇頁。
- (13) 同三一六頁等。 に詳しい。なお、 「鎌倉時代における神話及び伝説の発展」(史林二五―二) 伝説の縁起化の問題については村山修一氏 ゴーリキー「ソヴェト文学について」(「文
- 同一三頁。

学論」除村氏ら編)

所収参照。

(14)

- (15) 同四二七頁。
- **16**) 地物が出てくることに注意せよ。 巻六、卅四、二八二頁。なお、こういつた形でお伽草子の本
- (17) 同九八頁。 な お、 津田左右吉博士「日本の神道」
- (18) 同二八二頁。 頁)参照。
- (19) 巻七・卅七・卅八。
- 20 同二一五頁以下。 一八頁。

(21)

同

同一七一八頁。なおこの五百生蛇身受身というのは、当時 この語は『神祇不拝』の立場の典拠になつていたらしい。 「本懷集」では「優婆夷経」としている。どちらにしても、 にいわれていた論点で、「諸神本懷集」などにもみえるが

(五三一四

には決して受容されなかつた専修念仏の場合を考察するこは、少くとも最上級の支配者――中央・地方を通じて――会機構の、特に領主・名主層のもつ問題でもあつた。それ地垂迹説の適用の場合にだけではなく、同時に、在地の社地垂迹説の適用の場合にだけではなく、同時に、在地の社

とによつて明らかになる。

対立関係は惣領対庶子・在家農民にあつた。 えるけれども、 領の一族として在家農民を支配する支配者層であるかにみ 中間層たる庶子 によつてほぼ疑いないところである。ただここに問題は 配関係が基本的なものであつたことは、 国社会はこういう形で出発したのである。 らは本質的には被支配者なのであり、 たこと、すなわち惣領―庶子(名主)―在家農民という支 当時の東国社会の基本的構造が、いわゆる惣領制であつ 一家父長制が原理である惣領制においては彼 (名主) 層の性格であつて、 惣領制の基本的矛盾 今日までの諸研究 鎌倉時代の東 一見彼らは惣

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田)たか」という問題は、先年来論争されたことであるが、彼親鸞の門弟が「名主・領主層であつたか耕作農民であつ

展開の方向にあつたと考えねばならないのである。展開の方向にあつたと考えねばならないのである。と併行して進むところの、物領対庶子・在家農民の矛盾のと併行して進むところの、物領対庶子・在家農民や最下層の教が被支配者のためのものであったとしても別に怪したにとつての本当の大切な問題は、かかる親鸞門弟の階級修にとつての本当の大切な問題は、かかる親鸞門弟の階級と併行して進むところの、物領対庶子・在家農民や最下層の教が被支配者のためのものであったという一般的前提にの教が被支配者のためのものであったという一般的前提にの教が被支配者のためのものであったという一般的前提にの教が被支配者のためのものであったという一般的前提にの教が被支配者のためのものである。

倒する方向においてではなくて、自ら支配機構の一部となりの独立(自らの新たな支配体制への努力)は惣領制を打き層の独立化の方向である。が、注意しなければならないの層の独立は強大な惣領支配に抑圧されてほとんど成立せ主層の独立は強大な惣領支配に抑圧されてほとんど成立せ主層の独立は強大な惣領支配に抑圧されてほとんど成立せが単なる内紛の程度を出ないこと、むしろこの段階では彼らの独立(自らの新たな支配体制への努力)は惣領制の解体、庶子勿論その方向は、全体としていえば惣領制の解体、庶子

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田)

直接支配下にある農民との関係においても決して古い家父方向は彼らの"反動化"に他ならず、これに応じて自己のおいて行われること、である。従つて、彼等の"独立"のり惣領を巨大な軍事ヒエラルヒーの中心たらしめる方向に

である。

つくつてゆくこと、が、特質であるとみられるのである。に対しては「氏族」「宗徒」「党」「一揆」等々の関係を長的関係を止揚せず新たな族的結合によつて抑圧し、外部

おける一向専修はどうなるであろうか。このことは東国のさてこのような方向が一般的であつたとすれば、東国に

宗が東国へ入つた時の問題を簡単にのべてみたいと思う。があるとおもわれる。ここでは「一宗行儀鈔」によつて真場合特に知られているいわゆる異安心の問題に密接な関係

「当家ノ行儀法式、蓮如上人ノコロマデハ六時ノ行法ニテ(本願き)」と記されていることだけからもわかるように、特弁候」と記されていることだけからもわかるように、特弁候の信州戸隠ノ権現ト箱根ノ権現トノ御示現ニヨテ定オー 本書は親鸞に仮託した偽書であるが、文中に「此一宗ノ本書は親鸞に仮託した偽書であるが、文中に「此一宗ノ本書は親鸞に仮託した偽書であるが、文中に「此一宗ノ本書は親鸞に仮託した偽書であるが、文中に「此一宗ノ

六役ノ衆トテ清僧六人ヅヽ代テ勤メラル、

大カタ行儀鈔ノ

ら南北朝期にかけて公然と流布していたと考えられるものヤウナルヤウスナリツルニ……」と伝えられ、鎌倉末期か

ろで長蓮房なる異端者の例を挙げて戒めていることである。二十箇条にわたり並べているが、注意されるのは到るととさてこの行儀鈔は、親鸞門流の念仏者の守るべき行儀を

そこでまずこの長蓮房なるものがいかなる人物でどんなこ

とをしたかをみてみると、

テ拜ムへカラスト謂シケル、 (パワセ) (パワセ) (パワセ) (パワセ) (パワセ) (パワセ) (パワセ) (パワロ) (パロカリ、 (パロカリ) (パロカリ、 (パロカリ) (パロカリ、 (パロカリ) (パロカ) (パロ) (パロ) (パロ) (パロ) (パロ) (パロ) (パロ) (パロ)

長蓮カ人ニ示ス様ハ、極楽ニハ彌陀ヨリ外ニ仏ナシ、故ニ一仏引せず、遂に死罪に行われたと戒めている。 更に、とあり、その弟子の住蓮・善綽は法然の教をうけながら承

業ナリ、神祇冥道ハケガレモノ也ト示。 実二社ヲ見レバ蛇トナルトイヒキカセ、先祖ノ形像ヲバ輪廻ノニ帰スレバ往生スト教テ化仏菩薩ヲ努々目ニモミジ、神窟ハ権

ゆる 単に ク也、 願ぼとり" であつたとみられる テ恭敬礼拝ヲ止テ礼拝ハ雑行ヨト申弘」め、 ら書物を作つて「神へ汚レ物ゾ、 とあるように徹底的に神祇余仏を排斥し、 テ魚鳥猪肉ヲ焼テ狐ニ食ハス 「仏前ノ火ニテ魚ヲヤキ拠ミ食テ身モ心モトモニ不浄ニ成 "神祇不拝" "造悪無碍" 地獄へ落ル」などといい であり、 "余仏誹謗" 要するに ル」という状態だつたという。 であつたばかりでなくい 社参物参を禁じ、 神祇冥道へ迷ノ者カ近ツ 「歎異鈔」 「宮讃嘆」とい 或は「仏所 にいう その上 ||本 わ

碍# な」「本願ぼこりは地獄へ落る」と始終繰返している。 ベ あつて、 "本 「行儀鈔」がどれだけ真実を伝えているかどらかは知らな さてこの長蓮なる者が実在の人物かどうか、 ح 願ぼこり! 親鸞教団に "専修賢善" 「行儀鈔」はこのような鎌倉初期の 「長蓮流のやり方をして他宗からとかくいわれる に対する誠めという形で成立しているので ま V とが、 ては 鎌倉初中期に 主として 末期には "知識帰名" "造悪 また果して の異安心 "造悪無 無 碍 抑

が

主流をなしたとい

われるが、

森龍吉氏は関東教団では建

鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」

(黒田)

る意図を以て書かれた"専修賢善"の異端書なのである。 (異安心)の質的転換があつたととを明らかにされた。鎌 (異安心)の質的転換があつたととを明らかにされた。鎌 に、造悪無碍の)異解を口実として古い勢力に新しい宗教 に、造悪無碍の)異解を口実として古い勢力に新しい宗教 思想とその集団を 毎告する対蹠的な偏向」、もつとはつき となりいえば、客観的には古い勢力との妥協を積極的にすすめ となりいえば、客観的には古い勢力との妥協を積極的にすすめ となりいえば、客観的には古い勢力との妥協を積極的にすすめ というない。 の質的転換があつたととを明らかにされた。鎌 長四年から七年にかけて造悪無碍から専修賢善へと異解

係を温存し惣領の側 くるが、 0 通りである、が、なぜたたかわないで弾圧に屈し追従する 追従という政治情勢を指摘される。 治的反動的に温存助長せざるを得ず、 たことから、 先にのべた庶子・名主層の よる秩序の固定化への動向」に伴う弾圧の強化とそれへの か。 ――それには当然信徒ら自身の足場が問題になつて 実はこれは神祇の問題と不可分である。 宗教の 面では呪術・ たったる "独立"が内部に古代的な諸関 "反動化" シ 全体としては勿論その -1-これによつて労働的 1 0 方向 ~ = ズ のものであつ ム等 芒 れは、 々 を政

九

0

か。

それではなぜこの時期にこういう形で異安心が転換する

森氏は「承久の変を転機とする新旧両政権の妥協に

るからである。神祇余仏の問題が専修賢善という自力修善社寺へ売り渡し、かくて特に"反動"=神祇崇拝の形とな生産的な基盤に立つ素朴な呪術をも歪曲して旧い勢力の諸生産的な基盤に立つ素朴な呪術をも歪曲して旧い勢力の諸

0

「偏向への岐路となり、具体的にも「行儀鈔」にみる如く

戀教団を売ろうとした異解の善鸞が が真言立川流と緊密な関係をもつていたのは、 が宗教家たちの説教によつて一向専修への方向もとり得る 主要な内容となつたのはこのためである。 時も他の本尊をばもちいず、 であり大殿と呼ばれて国中から帰伏され、 服しないままでの神秘的な一向専修であつたのであり、 ること、 のやり方が神祇を排するといいながら甚だ奇怪な行状であ とは無縁であり、 民衆的な呪術に伴つた限りの神祇崇拝は、 治的に色分けされるようなものでないことがわかる。 このようにみてくると、 また垂迹説に組織されることにもなるのである。 また長蓮がその一例であるように一般に造悪無碍 垂迹説でも専修思想でもない。 神祇の問題が単純に階級的・ 無碍光如来の名号ばかりをか 「神子・巫女の主領」 しかも「かかる 本来ペシミズ 呪術性を克 ただそれ 長蓮 実際、 親 政 厶

しすすめるのである。しかもにすずめるのである。しかもになつたときに「行儀鈔」のように積極的に神祗崇拝をおただ善戀のように神子・巫女が全面に出たときには明らかけて一心に念仏せられけるとぞ」というのもそれである。

陀ノ垂迹ニテ在ユへ也ト空上人仰アリ」 「寺ヲ建立セバ三尊ノ如來丼ニ熊野権現ヲ勧請申ベシ、本地弥「寺ヲ建立セバ三尊ノ如來丼ニ熊野権現ヲ勧請申ベシ、本地弥以アノ守ゾカシ」「殊とハ来世ノ為、王法ハ今世ノ祈ゾカシ」ハ人界ノ守ゾカシ」「孫ノ二十八宿、地ノ三十六禽、国土ノ神祇冥道の人界ノ守ゾカシ」「孫子・ナッテ垂迹ヲ兎角ゾト申サンハ彼長蓮カ末

対に不要であつた。 ものである。しかし同じ偏向でも造悪無碍には垂迹説は絶ものである。しかし同じ偏向でも造悪無碍には垂迹説は絶らいらように"反動"に伴い不可避的に偏向がおこるやいというように"反動"に伴い不可避的に偏向がおこるやい

にみられたが、この上に中央貴族的・都市的な本地垂迹説基礎をもつ素朴な精霊・呪術が比較的自然な形で説話の中以上、東国の場合を要約すると、ここでは生産的生活的

位置づけられると思うのである。 拝が所詮弥陀 単なるエ D 内省的且意志的な契機を欠いた役論理的神秘的なも すなわち一遍の時宗においては、 す は遂に存立の基盤を失い、 礼 展開の特殊性か が の低俗さも、 全国的に拡がつた時宗の基盤も成立するものとみられ するところこうしたすべての事情が相俟つて、 b をふまえながらも、 0 の神勅や踊念仏にみられるように、 鎌倉末期社会の全体の矛盾からくる大衆的なエ かえられてその克服の論理を失うのである。 Ų: ためにはじめ充分成立の また本 て クス れ 以 願寺覚如が Ŋ を組織し従属させた。 仏に帰することを垂迹説に則つて 5 上の事情を背景に シ 1 にすり 中期以降一 克服の論理をもたないためにそれ 「諸神本懐集」にお かえるものでしかなか 専修念仏は妥協的な神秘 可能性をもつてい 般的なッ してはじめて思想史上に 有名な熊野の 他 方、 その「信」 炭動# 惣領 V ,て神 た 化が 鎌倉末期に 制の 論じ 7 つたの そして帰 は全く 向專修 ネ のであ に主義に 謶 矛 あらわ 劫往 たあ の崇 盾 ル を 半

1 鎌倉期の家父長的奴隷制の本質とその 鎌倉仏教にお ける 向 専修 Ł 解 「本地 体 Ø T. 般 迹 的 な (黒 冏 題 H K

> 究 一 六 三 ・ いて 化の二つの途」を参照 四号) 特に 安良城 盛 昭 氏 太閤検 步 47 ţ たえてー 地の 歴 史 的 一日本に 前 提 おける 歷 史学 封建研

法輪・昭和廿五年八月号)

2

(3)

宗教的ペ カ<u>-</u>。 間層であるとい 正信をも 家永博士・前掲論文参照。 シミズムが発生する根 ち得ないという根 われるが、 L 服 拠はなく、 部氏 かし中 拠こそ乏しいのではなか は 間層だからと 罪 火安心を 反つて最下層自体 発 生 いうだけで Š す 0) ろう から が 4

学研究 橡川 入つたとき、 摘されている。 一三一号) 朗 氏 ト Ç, ス かゝ に、 ۲ K 異 y (教的な要素が媒介となつ アーフラ 六世紀の西欧蛮族の ン = 1 ル 厶 中 K 0 キリ て V て ٧ì た ス ኑ かゝ が指 · 教が 歴 史

4

(5) 永原慶二氏 1 「東 国 ĸ 78 け る惣 領 制 の 解 体 過 程 (史学雑 칾 六

7 6 百瀬氏・永原氏・同 場合には守矢文書・市河 史学研究一五三号)は、 百瀬今朝雄氏 に数多く散見する。 「下総国に 有。 とのことをあ なお、 文書等をみてもほ おける香 「氏族」 取 氏 とづけている。 と千 等々の ぼ同様にいえる。 葉氏 語は Ø `対抗」 「太平記 (歴 0

有註記所引「御伝照裝記」(一三〇頁)。

(10)

8

 $\bigcirc = --$

五六頁)。

以下

引

用

は

すべてとれによる。 奥宗大系・第三六巻 所収

た四人の二人の名(歎異鈔奥書・拾遺古徳伝)である。とれは建永二年法然・親鸞らが配流されたときに死罪になつ

- 11 石田充之氏「異安心」。
- (12) (14) 森氏・前掲論文。
- (13) 本書末尾には承元四年八月とあるが勿論偽である。

V

- (15) 前掲「呉義集」に専修賢善計として収められているものは、 大部分神祇余仏の問題にふれて「誹謗」を禁じている。
- 16) 石田氏・前掲書。
- 17 「慕帰絵詞」巻四。

Ŧ, 総 括

関係にある論理は、 の思想について、それがいかに穏健なものであつたと説明 の基調をなすという点である。 この対立が荘園制の変質解体期におけるイデオロギー闘争 まず第一に、この時代の宗教思想における基本的な対立 以上のべた所を総括 次の如くである。 一向専修と本地垂迹との両者であつて、 し、 なお11三の点について指摘すれ 一向専修の典型である親鸞

> 説を前面に押出しつつ一向専修と対立せざるを得なかつた 領主的なものの昂揚とともに、 して系譜づけたのであり、 中間層の神祇信仰を、そのおくれた且反動的な側面を利 長制ないし荘園体制によりかかつている領主 支柱は本地垂迹説であつた。すなわち一つには、当時各地 時一向専修に攻撃される立場にあつたから、民衆獲得のた 自己の"民衆化"をはかるとともに、 面或は素朴な説話を「系譜論」的に自己の側に組織し以て の社会的矛盾の特質からくる制約としての民衆の呪術的 めの新たなる体勢が必要であつたが、それの究極の論 "本願ぼこり"の諸事実に明らかである。 わゆる旧仏教は、 本来荘園制と結合しており、 従つてかかる民衆的ないし在 旧仏教はい 他方、本質的に家父 よいよ本地 しかるに他 名主等 しかも当 垂迹 ったの 理的 地

髙まるにつれて「日本は神国なり」という思想が広汎に現 V われるが、こういう時期に神国という観念が擡頭するとい 第二に、 鎌倉時代に入り荘園制の矛盾が激化し変革的な気運が いわゆる 「神国思想」について注意しておきた

制と闘う人々に最も有力な論拠と確信とを与えたという

ひそんでいたことは否定出来ない。

それは彼の思想が荘園

彼の思想の本質に極めて鋭い政治的なものが

のである

迹説は、 のことは日蓮や元窓の場合についても基本的に同じである。 成立するもので、 想は、「垂迹説的」組織化のためにのみはじめて概念化され 共に神祇信仰や説話が浮び上がるため、 具合である。これは要するに、地方的在地的勢力の擡頭と 持「喜何事日本国世超」思食」というかと思うと、 垂迹につ に引用した「神道集」では、「帝思食 閻浮提啓王 是程笛 争 特殊性の意味でしかなく、時として支配者の思い上つた空 本は神国というのは本来単に神が垂迹した国という地方的 すなわち、この時代の常識からその世界像を考えるに、 むしろ徹頭徹尾反動理論であるという方が適切である。 威張りであつたり反対に卑屈であつたりする。たとえば先 に説く入もあるけれども、 うことからこれを農村的基盤に立つ進歩的な思想であるか れこれ考えてみているだけのものである。 て「只本朝辺州故無二仏説| 無二論判1 」と書く、 ح れに関聯して神道説にも触れておきたい。 奈良時代の 鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田 思想そのものとしては何の進歩性もなく 「神は仏法を喜ぶ」から平安中期以降 私にはそのように評価出来ない 神の垂迹した国を つまり神国思 抑々本地垂 という Н

か

ば、 が仏教の前面に押出されるようになるが、 知識のよせ集めにしかならないのは当然であつたのである。 う神道説が津田博士もいわれる如く全く思いつきの解釈や® 神道説を形成してゆくにすぎないのである。 く、その努力の中から自ら不可避的に神代紀を発掘し更に との総合を強行して 「神は仏と同じ」を経て、 垂迹説の役割は各地の神祇にまつわる説話と仏教教理 「縁起」をつくるためのものでしかな 鎌倉後半期には神の和光同 この段階に至れ 従つてこらい 塵

0

義 う論理は必ず権力と一体である。親鸞が「主上臣下背」 法違い 故に超越的であり、 性を低俗な没論理性へ導くところの、無内容且附会的な つても、 得る天皇の伝統的権威と同じ性格であるといえる。 る荘園制反動勢力の論理である。 系譜論」であり、 成」念結」怨」と書いたのはこのことを指しているとい あながち言い過ぎではあるまい。 また無内容なるが故に無責任に変貌し 以てあらゆる要素を「秩序」に組入れ あたかも無性格であるが 従来繰返し指摘 とうい

地垂迹の基本的性格は、民衆のもつ奔放な意味での没論

以上要するに、

一向専修の「克服の論理」に対立する本

| 終こ日生こうから仏女の日本仏、申道说こうから家鎌倉仏教における「一向専修」と「本地垂迹」(黒田

史的精神、神代以来の共同体的特質等々も、 性格そのものではなく、 されてきた中世における仏教の日本化、 ・文化的効果であつたといえよう。 客観 的に は か かる政 神道説におけ 治権 決して民 力の 思 歷 想 0

1

題に、 は、 複雑な問題をも、 えねばならないのに、 以 Ŀ それらの点は大方の御叱正をまつことにして、 多くの誤りを残すものであることは充分承知し 知半解 人的な差異 て粗雑な見解を披歴した。 0 知識 このような乱暴なやり方で取上げたこと をも 諸先学が永年丹念に探究され ―たとえば法然と親鸞 顧ず、 時代思想全般にわ 殊に思想史の場合には を充分考 一応本 てい たる問

点も落着かないことになつた。簡潔にまとめ得ない不手際で、多くの重要な問題が残されてしまつたばかりでなく論合についてものべる筈であつたが、紙数その他の都合で省合についてものべる筈であつたが、紙数その他の都合で省

稿を終えることにする。

を深くおわびして、それらは稿を改めることにしたい。

きでも、 永原壁二 あ 現に武士の神国思想のために貴族が恐れをなし 士を支配するためのものである以上、これはおかしいと思う。 とされるが、幕府が貴族に対して革命的意味をもつていたと まり聞いたことがない。 定の条件のもとでは革命的役割を担いえた」(一四〇頁)、「神国思想は、幕府の新しき支配のための思想として 神国思想そのものは貴族を打倒する論理ではなく武 は 縄 日 本歴 史 たという話は こに 46

③ 「教行信証」化身土巻(末)後序。なお「宵② 津田左右吉博士「日本の神道」第四・五章。

③ 「教行信証」化身土巻(末)後序。なお「真宗聖教全書」が
③ 下教行信証」化身土巻(末)後序。なお「真宗聖教全書」が
第 「教行信証」化身土巻(末)後序。なお「真宗聖教全書」が

Ikkosenshu and Honjisuijaku in Kamakura Buddhism

bу

T. Kuroda

The Buddhist activities in the Kamakura era have long been a theme of discussion. But when we say that the newly introduced Buddhism had reforming energies, we have that specific logic in mind that was elaborated in the doctrine of the *Ikkosenshu* (一向專修). This was, indeed, the reflection of the aspirations of the lower classes thrown into the turmoil of the disintegration of manorialism, but in the long struggle of ideologies it was defeated. Meanwhile from the upper strata of the society there emerged a system of thought which took the side of the defender of the manorial regime. This was the doctrine of the *Hon-jisuijaku* (本地垂迹), that reactionary conception *von oben* which was intended to arrest the popular agitations *von herunter*.

This struggle of the different views, however, was determined by the various aspects of the particular localities and provides characteristics too complex to be generalized. The object of this article is an attempt to illustrate the process of the struggle in cities and among the Easterners, and to pursue the political significance of the waning of the teaching of Shinran (親愛) to which posterity has paid homage as the highest among saints.

The Reconstruction Policy after the Civil War in the United States

by

Y. Yamagishi

The object of this essay is to trace the change of policy with regard to the reconstruction of the South after the Civil War in the United States with emphasis mainly on the policy of Andrew Johnson. The antihesis between the policy of Johnson and that of the Radicals was not only the struggle for supremacy but also the fundamental antagon-